

News Letter

NEWS LETTER No.52 September 2018

Contents

- ▶2017年度 公益財団法人俱進会助成事業完了報告 … 1
- ▶ひきこもり対策講座から
ひきこもり“ダイアログ”講座へ … 1
- ▶STAFF INTERVIEW Vol.1 … 2
- ▶会費等報告 … 3
- ▶CENTER NEWS … 4

2017年度 公益財団法人俱進会助成事業完了報告

2017年度4月1日～2018年3月31日の1年間、公益財団法人俱進会の助成を賜り、「ドロップアウトした若者の社会復帰を後押しする活動～就労体験の提供と後方支援」を実施いたしました。

この度、実施した事業は以下の通りとなります。

- ①若者のフォローアップ体制の充実
- ②若者参加型連携会議の仕組みづくり
- ③若者による企業開拓

本事業によって若者と受け入れ団体側の相互理解の促進、働きやすい環境作り、自尊心の向上などが見受けられ、若者と団体側との「対話」を重ねることにより、働きやすい職場環境が整えられることが発見されました。今後はこのモデルが様々な企業・団体に転用可能か検証していきたいと思えます。

以下協力企業・団体

株式会社シミズオクト様／社会福祉法人三篠会様
 宗教法人明治神宮様／株式会社島田組様
 ステム株式会社様／シルクロードカフェ様



ひきこもり対策講座から ひきこもり“ダイアログ”講座へ

当センターでは青少年の不登校・無気力・ひきこもり等をめぐる問題を多角的に取り上げ、本人とその家族への包括的な援助活動を展開してきました。その一環として斎藤環先生（筑波大学教授）をお招きし、平成10年5月に「実践的ひきこもり対策講座」を開講し、学識的な講義が中心となる「理論編」と講師に直接質問等を行い、それぞれのご家庭の事を相談し、全体で共有する「家族会」を軸にご家族の皆さまに寄り添ってまいりました。

平成30年4月から、より実践的な講座とすべく以上のプログラムから「ワーク」を取り入れ「オープンダイアログ的手法」を用いた対話を実践する場を取り入れました。これに伴い、今後はひきこもり対策講座から「ひきこもりダイアログ講座」と名称を変え、運営していきます。

今後とも皆さまにとって実りの多い講座を開催してまいりたいと考えております。今後とも変わらぬご支援をお願いしますと共に、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



STAFF INTERVIEW

VOL.1

今号より新企画「STAFF INTERVIEW」をお届けいたします。タイトルどおり、青少年健康センタースタッフの面々に、今年4月から新たにスタッフ（事務局）の一員となった中村が、センターにまつわる話や仕事に対する思い・心得などをインタビューしてまいります。記念すべき第1回は、センター設立当初から30年間、つまり平成というひとつの時代を通じて事務局の窓口となり、会員の皆さまとセンターとの橋渡し役を担ってきた現役ベテランスタッフ3名（柘植、河野、澤田）に話を聞いてまいりました。

—皆さん、1990年前後からセンターでのお仕事をスタートされています。ここに入られるきっかけやそのときの印象、また「ひきこもり」についてどの程度ご存じだったかなど、当時のことをお聞かせいただけますか？

柘植 私は、以前勤めていた会社※1から「ちょっと手伝いに行ってくれないか？」と紹介されたのがここだったんです。まさかそれから30年もいるとは思わなかったですね（笑）。最初、「ひきこもり」のことはほとんど知らない状態で入りました。事務局にはすでに江頭さん、桑山さんという優秀な先輩がいらっやあって、お二人の電話相談でのご対応などを、私は経理の仕事をやりながら背中中で聞いていました。まさに「門前の小僧」という状態でしたね。とても勉強になりました。

河野 かつて、このセンターでは「カウンセラー養成講座※2」というものを開催していて、私はその「養成講座」の第1回目の修了生です。そもそも大学では心理学専攻でして、卒業後は自分で学習塾を開いておりましたので、思春期の心理というものに興味があったんですね。それで、センター設立者である稲村博先生（故人）が朝日カルチャーでおやりになっていた講座を受講していました。そのとき、この存在と「養成講座」が新しく開催されることを知ったんです。「ひきこもり」については、言葉としては聞いたことがあるぐらいで、じっさいには講座や実習をとおしてわかっていったという感じでした。

「養成講座」修了後、先程お名前が出た事務局の先輩方の下に付くかたちで、電話相談などに関わるようになりました。仕事をするうえで、お二人からは当初よりたくさんアドバイスをいただきましたから、気持ち的にそこまで負担に感じることはなかったですね。電話相談はご両親、とくにお母さまからのご相談がほとんどでした。当時はこのセンターに関わってくださっている先生方は別として、「ひきこもり」ということにまだそれほど理解がなかった時代で、「病院に行っても相談にも乗ってもらえない」というようなお話をなさる親御さんがけっこういらっしゃいました。

澤田 私も河野さんと一緒に、この「養成講座」の出身で、第3期生です。私はセンターを知る前から江頭さんを存じ上げていて、彼女から「養成講座」に誘っていただいたという経緯です。

「養成講座」を修了したタイミングで、「ハウス※3で働かないか？」とお声を掛けていただきました。それで当時、川崎にあった池上ハウスに週1で入るようになりました。ハウススタッフというのは、実際の生活の中に入っていくわけだから、頭とか本の中の話ではない。さまざまな方と

生活をともにするというのは、ある意味できつかったですね。「ひきこもり」という実態や現実をよくわかっていない状態で、ひきこもり支援の現場に飛び込んでしまった。でも、それが良かったのかもしれないと思うんですね。なまじ知らなかったことが。

—それぞれ異なったポジションでセンターに関わるようになられたんですね。ですが、斎藤環先生の講座などでは一緒にお仕事されていますよね？

柘植 ええ。斎藤先生の「ひきこもり対策講座（現・ひきこもりダイアログ講座）」は、1998年から始まったんですね。

河野 そうでしたね。あまりに受講者の人数が多かったものですから、私も受付や椅子の整理を手伝うようになりました。当時、受講者は100人を超えていたと思います。

柘植 あのころは大変でしたね。私も途中からお手伝いするようになりました。この講座に出席できない会員の方々のために、江頭さんが「茗荷谷通信」を始めたんですね。お手紙で寄せられたご質問に斎藤先生がお答えするという紙上相談も彼女の発案でした。「茗荷谷通信」ももうじき200号になりますね。

澤田 私も途中から斎藤先生の講座をお手伝いしていますが、「なるほど、そういう見方があるのか」と、とっても勉強になっています。2002年からは、NHKの教育テレビ（現・Eテレ）で「ひきこもりサポートキャンペーン」というものが始まりました。青少年健康センターからは「ネット相談室」の回答者として、江頭さんをはじめとするチーフとわれわれサブが各曜日ごとにNHKに向向き、寄せられたご相談にお返事するというメール相談員みたいなことをやりました（～2005年）。そこでは斎藤先生の監修の情報をお伝えしていました※4。そういったところでわれわれもひきこもりの方への対応を共通に理解できたというところがあります。

柘植 あのときは、みんながNHKにお出かけになってしまって、私一人留守番でそれはそれは大変だったんです（笑）。

澤田 そうでしたね。でも見えない先を目指して、誰もやっていないことをこれからやっという勢いが、あのころのセンターにはありましたよね。とても先駆的でした。「ひきこもりの人たちが親御さんの環境をより良くするために、できることは何か？」と、皆さんが一丸となって前進していく中に私も入れていただけて、とってもうれしかったです。



柘植 悠子

青少年健康センターにおける普及啓発部門（とくに講座やSW会）を担当。センター事務局員として、かつては経理も担当した。



河野 治子

「カウンセラー養成講座」第1回修了生。センター事務局において電話相談、講座などを担当。



澤田 晶子

「カウンセラー養成講座」第3回修了生。ハウススタッフ（池上・保土ヶ谷・小日向）をはじめ、講座などを担当。小冊子などの編集業務も担当した。

—では、センターで印象に残っていることをお聞かせいただけますか？

柘植 印象に残っているというのとは少し違うかもしれないけれど、いまの斎藤先生の講座のお話で、SW会のお母さま方のお顔が思い浮かびました。なかにはもう10年以上、「茗荷谷通信」のお手伝いをしてくださっている方々もいらっしやいます。月に2回もボランティアで来てくださる。本当に頭が下がる思いです。

河野 本当にそうですね。心から感謝しています。

澤田 ええ、本当に長い間、ずっと。ありがたいですね。

柘植 それから、斎藤先生にこの間、「講座にご出席されているお母さまたち、なんだかお顔が明るくなりませんか？」と聞いてみたんです。そうしたら先生も「そうだ」っておっしゃっていました。

河野 そうなのよね。ワークの「対話」で、皆さんがお話をしていきますでしょ。やっぱり自分の思っていることを話せるというのがいいのかなって私自身は思っています。ひょっとすると、皆さんがご自身の問題に対して、私が「養成講座」で受けたサイコドラマ※5のような体験学習をそこでされていらっしゃるんじゃないかしら。

体験学習はとても大変でしたが、本当にいろんなことを教えていただきました。私の個人的な体験だけれども、長女が自立して家から離れたときに、どうしようもない喪失感に襲われて、落ち着かなくなっちゃったんです。そのことをサイコドラマで取り上げていただき、（演技で）臍の緒を切ったんです。そうしたら、落ち着かない気分は消えて、すっきり立ち直れたんです。だから、なるべく皆さんにも出てほしいと思うんですけどね。ここでの講座や体験学習的なものは、ずいぶんその方の助けになるはずですから。

澤田 私の印象に残っていることは、やっぱりハウス。先程も言ったように、きつかった面もあったけれど、うれしいこともありました。ハウスから大学受験をしたメンバーがいて、受験当日の朝早くに私もおにぎりを作ったりして彼を送り出して、もう母親の気分でした。擬似的母親かな、ハウスだから。おせっかいおばさんかもしれないけれど（笑）。彼、ちゃんと合格したんですよ。でも、受かる／受からないという以前に、本人の実力と、ハウスのみんなで押す力の両方が発揮できたことがうれしかったですね。

柘植 ハウスにはお笑いの芸人さんになった方もいらっしやいましたね。

澤田 ええ。彼はハウスのクリスマス会にも来てくれました。社会の中で自分の居場所を見つけているという意味で、他のメンバーにとっても「希望の星」というか、「自分も大丈夫だ」という感覚を持ってもらえたと思いますね。

—では、皆さんの今後の目標をお聞かせください。

柘植 私、昔ね、お母さま方から「自分たちがいなくなるまでぜったいにこのセンターをやめないでね」とって、はっき

りと言われましたの。だから、やめるわけにはいかないのよ……。だから、ここがひとつの希望の光で、それが消えないようにしていきたいということでしょうか。そして、「ダイアログ」の講座だけじゃなくて、本当に困っているご家族の気持ちに寄り添っていけるよう、試行錯誤しながらでもやっていきたいです。

河野 私もずっと長く関わってきたいと思っています。センターの講座にもっと若い方にもたくさん来ていただけるよう工夫もしたいですね。あと、私自身が戦後の引揚寮で育っているものだから、井戸端会議の良さみたいなものを実感しているんですけどね、でもそういう地域のつながりは、いまはほとんどなくなってしまったでしょう？ ですので、お母さま同士が集まってお話ができるような場所をもっと提供していければと思っています。それから、日本の「家庭の問題を出すのは家の恥」みたいな意識が、これから変わっていくといいと思っています。これは目標じゃなくて願望かしらね。

澤田 センターが続いていくために、若いスタッフにどうつなげていくかということも大事ですよ。温故知新という、これまでに培ってきた道のりをうまく活かしていけるといいですね。われわれにもまだできることもあるので、元気な間はやる、かな（笑）。

—最後に、SW会員さんに向けてメッセージを。

河野 「いっしょにがんばっていきましょう」かしら。

柘植 そうですね。「いっしょに歩いていきましょう」。

澤田 「末永く、諦めないで、参加型で」。参加型は「『茗荷谷通信』を読む」というだけでもいいので。そしてわれわれもできるかぎり続けていって、「継続は力なり」にしていきたい。歳をとっていくと多少諦めみたいなことも入ってきたりするかもしれないけれど、やっぱり諦めない。縁があって親であり、子であり、センターとの関わりもある。その縁というものは大事にしたいと思いますね。

- ※1 千代田化工建設株式会社。当時会長であった玉置正和氏は当法人設立メンバーであり、当法人をご支援いただいた。
- ※2 思春期・青年期に特化した講座・研修活動。ご家族や援助者を対象に実施。開講当時、修了に4年を要する充実した内容の講座であった。（以下、「養成講座」と略記）
- ※3 1987年に開設。ひきこもり等の若者たちの宿泊型グループ施設。2010年～休止中。
- ※4 このときの内容は、『hikikomori@NHK ひきこもり』（斎藤環監修、NHK「ひきこもりサポートキャンペーン」プロジェクト編、NHK出版、2004年）としてまとめられ、出版された。
- ※5 即興劇の手法を用いて、参加者に自己表現を行わせる集団精神療法のひとつ。心理劇とも。

故 江頭 瑞枝

センター設立時より事務局員として勤務。講座や相談窓口における主任的存在であった。「江頭さんがお亡くなりになられて、われわれももちろんですが、相談者の方々の喪失感はいかばかりかと思ひます」（柘植）



会費・寄付金・助成金・補助金報告 (平成29年11月～平成30年7月)

青少年健康センターは大勢の個人の方々のご献金、および団体・企業様の助成金、ご寄付、補助金などによって支えられています。ここに心から感謝申し上げます(敬称略)。

【正会員】 稲村 優子 今村 郁子 井利 由利 岩佐 壽夫 河野 治子 菊池 章 日下 忠文 倉島 徹
 倉本 英彦 齋藤友紀雄 笹原信一郎 菅原 建 関川 俊男 高橋 清久 玉置 正和 西村 秋生 能勢 孝子
 日高 正枝 福田喜代子 眞下 テル 松崎 一葉 宮田タマ恵 松岡太一郎 計: **500,000円**

【維持会員】 伊藤 誠子 伊藤 三恵 遠藤幸代子 榎本美津恵 生出 美穂 小鹿 敏夫 大塚 慶子 小西 香里
 佐藤 悦子 鈴木 邦一 田中 邦子 戸村みどり 中村 弘 西村 四郎 福山なおみ 藤井 忠幸 丸山 邦子
 三村 蓉子 柳下 弘 山本 幸利 渡辺 彰子 渡辺真知子 渡辺実知子 計: **230,000円**

【SW会員】 SW会費+維持会費 17名: **255,000円** SW会費のみ 111名: **1,110,000円**

【寄付・個人】 石村 愛子 稲村 優子 大野レイ子 小野田欣子 小山久美子 影山 俊治 河合 翔太 河下 浩信
 小松ひろみ 鈴木 厚一 鈴木 隆之 千葉 泰子 西浦加代子 橋本 進 花井 一代 増田 太陽 松本 寿昭
 匿名2名 計: **520,210円**

【寄付・団体】 ウエスト東京ユニオンチャーチ、(公財) 毎日新聞東京社会事業団
 日本キリスト教団 西川口教会・阿佐ヶ谷教会、(株) LITALICO **346,000円**

【助成金・補助金】 公益財団法人大阪コミュニティ財団 150,000円
 日本郵便株式会社 年賀寄附金配分事業 3,679,000円 計: **3,829,000円**

CENTER NEWS

平成30年 (敬称略)

1月

- 実践的ひきこもり対策講座 20日
講師: 斎藤 環 (精神科医)
- クリニック絆 電話相談員研修 24日
講師: 藤堂 宗継 (臨床心理士)
- 若者の心の危機管理支援フォーラム 28日
東京銀座ロータリークラブと共催 於スペースFS汐留
- 基礎講座 後期 31日から5回 講師: 藤堂 宗継

2月

- 文京区主催ひきこもり講演会・個別相談会開催 17日
講師: 徳丸 享 (臨床心理士) 於文京区民センター
- クリニック絆 電話相談員研修 20日
講師: 谷口 万稚 (米国臨床心理士)
- 実践的ひきこもり対策講座 25日

3月

- 台東区主催ひきこもり講演会 3日
講師: 春日 武彦 (精神科医) 於台東区役所
- クリニック絆 電話相談員研修 16日 講師: 谷口 万稚
- 実践的ひきこもり対策講座 17日
- 関東子ども精神保健学会第15回学術大会 24日
協力団体として参加 於スペースFS汐留

4月

- クリニック絆 電話相談員研修 6日 講師: 齋藤 友紀雄
- ひきこもりダイアログ講座 22日 講師: 斎藤 環
- 茗荷谷クラブ フリーマーケット 29日 於池袋西口公園

5月

- 公認心理師現任者講習会開催 3～6日
於トラストシティカンファレンス・京橋
- 茗荷谷クラブ 清掃の中間的就労開始 12日から毎週
於社会福祉法人武蔵野会 障害者支援施設リアン文京
- ひきこもりダイアログ講座 13日
- クリニック絆 電話相談員研修 29日
講師: 倉光 洋平 (臨床心理士)
- 茗荷谷クラブ 一泊旅行 18～19日 於三浦半島
- 台東区主催ひきこもり茶話会・個別相談会 28日
於台東区役所
- 基礎講座 前期 30日から5回

6月

- クリニック絆 電話相談員研修 15日
講師: 谷口 万稚
- 東京都若者社会参加応援事業
ひきこもり等の若者支援団体による合同説明会
茗荷谷クラブが参加 16日
- 東京都立多摩総合精神保健福祉センター 18日
本人グループに職員が講師として参加
- 文京区主催ひきこもり講演会・個別相談会開催 30日
講師: 斎藤 環 於文京区民センター

7月

- 茗荷谷クラブ ハイキング 18日
於国営昭和記念公園
- クリニック絆 電話相談員研修 25日
講師: 藤堂 宗継
- ケアとしての就労支援を考える
～当事者・企業・支援者の視点から～ 28日
於中央大学駿河台記念館
- 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催
精神保健福祉研修 30日
講師: 井利 由利 於烏山区民会館

発行・公益社団法人 青少年健康センター (会長 齋藤友紀雄)

〒112-0006 東京都文京区小日向 4-5-8 三軒町ビル 102 TEL:03-3947-7636 / FAX:03-3947-0766
<http://skc-net.jp> E-mail: info@skc-net.jp